



『家なき娘』

作家 石井 睦美

『少年少女世界文学全集』（講談社）が、小学生だったわたしの愛読書だった。それより前に祖父を亡くしていたわたしは、じぶんの死より両親が死んでしまうことが心配で心配でならない子供だったというのに、どういっわけか本は、孤児の物語を好んで読んだ。

『アルプスの少女ハイジ』『家なき子』『家なき娘』。孤児の物語はたくさんあって、物語のなかで、主人公はとも生き生きと生きていた。両親がいなくなることを懼れながら、親のいない子供になって、学校にも行かず、ひとり自由に生きてみたいという願望を持ち合わせてもいたのだろう。またそのころは本を読みだすとたちまち主人公とじぶんを同化することができたから、持ち重りのする『世界文学全集』のそれらの物語が、わたしのこころを軽やかにした。

なかでも断然『家なき娘』だ。忘れられない場面がある。旅の途中、葦の湿原に面した小さな掘っ立て小屋（それは雁を狩る狩人のための建物だったと思う）に、主人公が寝起きする。彼女はブリキ缶を拾い、それを石で叩いて小さなフライパンを作り、葦のあいだに見つけた鳥の卵で、目玉焼きかオムレツかを作るのだ。

物語の魅力のいちばんが、お話の筋やクライマックスにあるのではなく、そういったなげない描写にあることを、子供だったわたしは感じていたのかもしれない。